

A. Schnitzler の作品 (主として Sterben) における独立的間接話法に就いて

奈良 文 夫*

(信州大学文理学部)

他人の言葉をそのまま繰り返して伝える直接話法 (direkte Rede) を、その言葉の趣旨をとり、自己の言葉に直して伝える間接話法 (indirekte Rede) に転換する際には、1)人称 2)時制 3)法 4)疑問文 5)命令文又は願望文等の変更を必要とするのである。Neuhochdeutsch ではその際、間接話法に於ては、主文章の時制とは無関係に接続法の現在群 (Präsensreihe) を用い、接続法の現在群が直接法の形と一致するときは、これと区別するために過去群 (Präteritumsreihe) を用いるのが一般的用法である。

例えば、

Direkte Rede :

Wohlan, sprach Granien zu Egmont, so wage es denn auf diese königliche Dankbarkeit! Aber mir sagt eine traurige Ahnung—und gebe der Himmel, dass sie mich betrüge! dass du die Brücke sein werdest, Egmont, über welche die Spanier in das Land setzen und sie abrechen werden, wenn sie darüber sind. (Schiller)

Indirekte Rede:

Er solle es denn wagen, sprach Granien zu Egmont, auf diese königliche Dankbarkeit. Aber ihm sage eine traurige Ahnung—und Gott möge geben, dass sie ihn betrüge—dass Egmont die Brücke sein werde, über welche die Spanier in das Land kämen und sie abrechen würden, wenn sie darüber seien. (Blatz)

然るに、例えば下のような文に於て、

Eine unsägliche Innigkeit erfüllte sie, und sie beugte sich nahe zu ihm herab mit dem Verlangen, den Hauch seines Atems auf ihren Wangen zu fühlen. O, wie schön war es doch zu leben! Und ihr ganzes Leben war er, nur er. Ach, nun hatte sie ihn wieder, sie hatte ihn wieder, und auf immer hatte sie ihn wieder! (Schnitzler, Sterben)

(云うに云われぬ愛情が彼女を包んだ。そして彼の息が自分の頬に触れるようにしたくて、彼の近くに身を屈めた。「まあ、生きているという事は、何んと美しい事だろう。それに自分の生活の全部はこの男の事で埋められている。ただ彼だけで。さあ今度は、私はこの人を取り戻したのだ、いつまでも私のものにしたのだわ。」と、彼女は考えた。)

*信州大学助教授

下線の部分は直接法で書かれていて、一見すると地の文のように思われるけれども、実は作中の人物たる sie (彼女) が、心の中で考えたことを、形式的には筆者(話者)の言葉の如く叙しているのであつて、元来一種の間接話法なのである。むしろ、直接話法と間接話法との中間的性質を持つている話法であると云うことが出来よう。この話法は、ドイツでは一般に erlebte Rede と呼ばれているものであるが、文法家により更に種々なる用語を以て呼ばれている、即ち、independent form of indirect discourse (Curme), Indicativus mimicus(扮役的直接法)(関口存男), Semi-indirekte Rede (Kruisinga) represented Speech (Jespersen), style indirect libre (Bally) 等、種々の用語がある。以下この話法を独立的間接話法と呼ぶことにする。

独立的間接話法は、一般に生彩に富み、感情的要素を多く含んだ文章に於て、筆者(話者)が、従属性を示すべきすべての形式を棄てて、他の人の思想、感情、夢想、印象、恐怖等を、文法的には独立した形式を以て、一層活々と伝達する場合に多く用いられる。

A. Schnitzler の作品を読んでいる際に、しばしば気付くことは、彼が得意とする心理描写をこの独立的間接話法を適当に用いることにより、作中の人物の感情を、より直截的、印象的に読者の心に訴えている事である。以下彼の代表作である Sterben を取り上げ、その文中に現われた独立的間接話法に就いて観察してみたいと思う。Text としては Gesammelte Schriften von A. Schnitzler, S. Fischer Verlag, Berlin, 1928 を用いた。(註 以下に挙げる例文の最後の数字は、この Text の頁を示す。)

Sterben は、Schnitzler が戯曲 Anatol (1893) によつて一躍文壇にうつつ出てから二年あと、彼の三十三才の1895年に発表され、これが小説としては処女作であるにもかかわらず広く読まれ、彼の文名を動かし難いものにしたのは、この作品の形式としての完成である。また、心理描写の鋭さに於て一つの頂点を示していると云うことができよう。

Sterben に於て、独立的間接話法が使用されている回数は、彼のほかの作品に於けるよりはるかに多いのではないかと思われる。前述の Text によると Sterben の頁数は全部で110頁で、この頁数の中に於て、独立的間接話法が用いられている箇所は約61箇所である。従つて、約2頁に1箇所の割合でこの話法が用いられている事になるのである。次に、この61箇所に現われている独立的間接話法の文章の長短を行数によつて分け、かつ用いられている回数を表にすると、次の如くなる。

行数	1	2	3	5	6	7	8	9	10	11	13	14	15	18	20	21	37	計
回数	20	9	8	3	1	2	3	1	2	2	2	3	1	1	1	1	1	61

上の表によつてわかる如く、1行乃至3行までのごく短い独立的間接話法を用いた文章が圧倒的に多く、全体の60%以上を占め、しかもその中で、1行以下即ち、わずか数語だけより成るものがさらに大部分を占めているのである。作中の人物が、咄嗟に心の中で考えたような短い文を、わざわざ引用符や、接続詞や、法の助けをかりて表現しているのは、そこに文章の中断が起り、表現がより客観的になる。感情を直截的、印象的に表出せんがためには、この話法を用いることは、非常な効果を収めることが出来るもの

と云えよう。それ故に、Schnitzler が短い文章の表現に、特に好んでこの話法を用いたことは、十分理由があることである。

先ず数語からなる、ごく短い場合の独立的間接話法の例を挙げて見よう。

1) Es war hellichter Tag, als er erwachte. Marie sass auf dem Bettrand, sie hatte ihn wachgeküsst. Sie lächelten beide. War nicht alles ein böser Traum gewesen? Er selbst kam sich jetzt so gesund, so frisch vor. Und draussen lachte die Sonne. (S. 19~20)

(彼が目を覚した時は、もうすつかり明るくなっていた。マリーは寝台の縁に腰を下していた。接吻して彼の目を覚したのだつた。二人は微笑み合つた。「昨夜の事はみんな悪い夢ではなかつただろうか。」と、彼は思つた。彼は自分がもうすつかり健康で、元気であるように思えた。戸外では、日が照つていた。)

2) Er tat einen tiefen Atemzug, und wie nun der milde Hauch so köstlich und leicht in seine Brust einzog, da konnte er mit einem Male nicht begreifen, dass er überhaupt krank sein sollte, Aber er war ja krank, er war ja verloren! Und plötzlich kam es wie eine Erleuchtung über ihn. (S. 34)

(彼は深い息をした、そしておだやかな空気が、いかにもおいしく、軽ろやかに胸の中に入つて行くと、突然一体自分が病気だということが理解できなかつた。「しかし己はやはり病気ののだ、助からないのだ。」と、彼は考えた。そして突然、なにか分つたような気がした。)

3) „Komm,“ sagte er dann leise und zog sie auf seinen Schoss. Sie schmiegte sich fest an ihn, legte die Arme um seinen Hals. Und sie war schön! Aus ihren blonden Haaren stieg ein schwüler Duft empor, und eine unendliche Zärtlichkeit für dieses schmiegsame, duftende Wesen an seiner Brust stieg in ihm auf. Tränen kamen ihm ins Auge, und er fasste nach ihren Händen, um sie zu küssen, Wie liebte er sie doch! (S. 35~36)

(「こちらへおいで」と、彼は小声で云つて、彼女を膝の上に腰掛けさせた。女はびたりと身を寄せかけ彼の頸に腕をまわした。「この女は何んと美しいだろう。」と、彼は思つた。彼女のブロンドの髪の毛から蒸暑い香が上り、自分の胸に寄りそつている、しなやかな、好い香りのする人に対する限りない愛情が、彼の心の中に湧き上つてきた。彼の目には涙が浮んだ、そして女の手を取つて接吻した。「自分はどんなにかこの女を愛している事だろう。」)

4) Marie rührte sich vom Bett des Kranken nicht weg. Was war das für ein endloser Nachmittag! Durch das Fenster, welches auf ausdrücklichen Befehl des Doktors offen geblieben war, kamen die milden Düfte des Gartens herein, — und so stille war es! Marie verfolgte mechanisch das Flimmern der Sonnenstrahlen auf dem Boden. (S. 106)

(マリーは病人の床の側を離れずにいた。「なんて長い午後なんだろうか。」と、彼女は考えた。医師の厳命で開いたままになつていた窓から、庭のおだやかな香が入つてきた。「まあ、なんて静かなことでしょう。」マリーは日光が床の上に落ちて、ちらちらしているのを無意識に眺めていた。)

5) Felix war nur einen Moment regungslos dagelegen, dann erhob er sich und blickte um sich. Sie war fort, er war allein! Eine schnürende Angst

kam über ihn. (S. 115)

(フェリックスは暫く茫然としていたが、それから立上り、あたりを見廻した。「彼女は逃げてしまつたんだな、自分一人になつているのだ。」と、思つた。頸をしめるような恐怖が彼を襲つた。)

上の例文によつてもわかる通り、この種の独立的間接話法は、はつきりと地の文と区別することが出来る。また、形式的にも Schnitzler は、この種の話法には感嘆符をつけて、地の文と区別していることが多い。Schnitzler が、特に好んでこの種の独立的間接話法を用いたかは、上に示した数字が、これを如実に表わしている。

次に比較的長く独立的間接話法が用いられている文章を挙げよう。

1) In demselben Moment war ihm alles klar. Sie wollte ihn zum Schlafen bringen, um in der nächsten Station unbemerkt aussteigen und entfliehen zu können. „Was hast du vor?“ schrie er auf. (S. 101)

(それと同時に、彼にはすべてに就いて合点が行つた。「この女は、己を先ず眠らせてから、次の駅でこつそり下車して逃げるつもりだな。」「お前は、何をしようとしているんだ。」と、彼は叫んだ。)

2) Er war so zufrieden wie lange nicht. Er erläuterte sich selbst, dass im Grunde alles das auf das bisschen Alkohol über seine Gewohnheit zurückzuführen war. Aber was verschlug es? Wenn es nur überhaupt so was gab. Wahrhaftig, der Tod hatte keine Schrecken mehr für ihn. Ach, alles war so einerlei. (S. 57)

(彼は今迄になく好い心持であつた。こんなに好い心持になつたのは、結局常より少し余計に酒を飲んだためだと、彼は解釈した。「併し、そんなことはどうでもよい事ではないか、兎に角こんな心持になれるのが有難い。実際、もう死なんていうものは少しも恐しくなんかないんだ。全くみんなどうでもよいことなんだ。」と、彼は考えた。)

3) Wo ist sie? Wo ist sie? Das Blut wirbelte ihm durch den Kopf, seine Augen wurden trübe, der Atem ging schwerer, und niemand war da. Ach, warum hatte er nur jenes Weib weggeschickt? Es war doch eine menschliche Seele. Nun war er hilflos, hilflos. Er richtete sich auf, er fühlte sich kräftiger, als er gedacht. (S. 84)

(「彼女は何処へ行つたんだろうか、何処へ。」彼の頭の中で血が渦巻き、目はかすみ、息は一層苦しくなつた。そして誰もそこにはいなかった。「何故己はあの婆あさんを追い出してしまつたのだろう。あれだつて人間だ。己一人だけでは、どうにもならぬ、どうにもならぬ。」という思いが心に浮んだ。彼は起上つて、自分が思つたよりは元気があるのを感じた。)

4) Es kam ihm ganz sonderbar vor, wie sie das jetzt so ernsthaft sagte. Ihre Persönlichkeit war ihm beinahe gleichgültig. Sie floss mit allem anderen zusammen. Ja, so war es recht, so musste man überhaupt die Dinge behandeln. Ach, nein, es ist nicht der Wein, der ihm das vorzaubert, der Wein nimmt nur irgend etwas von uns weg, das uns sonst schwerfällig und feig macht; — er nimmt die Wichtigkeit von den Dingen und Menschen.

Da, jetzt ein kleines weisses Pulver und da hinein ins Glas — wie einfach wäre das ! Und dabei spürte er, wie ihm ein paar Tränen ins Auge kamen.
(S. 57~58)

(その時、彼女がそれを本気で云うのが、男には全く異様に感ぜられた。彼にとつては、この女は殆どどつちでもよい存在であつた。彼女は他のすべてものと解けて流れ、一緒になつてしまつた。彼は心の中で考えた。「そうだ、全くこれは面白い。なんでも世の中のものはこの風に取り扱わなくてはいけないのだ。待てよ、これは酒のために浮ぶ幻影ではないぞ。日頃己をおつくうにし、臆病にしている或るものを、ただ酒が己の心から奪うのだ。人間や事物をひどく勿体らしく見せているのだ。よし、こういう時には白い粉薬を少し許リコップの中に入れてしまえば好い。まあなんて造作もない事だろう。」それと同時に、彼は涙が目に浮びのを感じた。)

5) Sie sass ihm gegenüber und betrachtete ihn. Sie fühlte sich ruhig. Nur ein mildes Bedauern war in ihr. Er war so bleich. Und so alt war er geworden. Wie hatte sich dieses schöne Antlitz seit dem Frühjahr verändert ! Das war doch eine andere Blässe als diejenige, welche ihr nun selbst auf den Wangen lag. Die ihre machte sie jünger, jungfräulich beinahe. Um wieviel besser war sie doch daran als er ! Noch nie war ihr dieser Gedanke mit solcher Deutlichkeit gekommen. Warum ist dieser Schmerz nicht peinigender ! Ach, es ist gewiss nicht Mangel an Teilnahme, es ist ganz einfach grenzlose Müdigkeit, die seit Tagen nicht mehr von ihr weicht, auch wenn sie sich zu Zeiten scheinbar frischer fühlt. Sie freut sich ihrer Müdigkeit, denn sie hat Angst vor den Schmerzen, die kommen werden, wenn sie aufhört, müde zu sein. (S. 97~98)

(彼女は男の向側に坐つて、彼をよくよく眺めた。彼女の心持は落ち着いていた。ただ気の毒だという、軽い同情があるだけだつた。「この人の顔は如何にも青い、めつきり老けてしまつた。春以来この美しい顔がどんになつたことだろう。私自身の頬だつて青いが、しかしこの人の顔の青きとは全く違つている。私の顔の青いのは、かえつて私を若く、殆ど娘らしくさえ見せる。この点では私の方が、この人より幾倍得だかわからないわ。」こんな考は、今迄に、こんなにはつきりと彼女の心に浮んだことはなかつた。「この苦しみは、何故そんなに切なく思われぬのだろう。これは、この人に対する同情心が無くなつたためでないことはたしかだわ。私が近頃ひどく疲れていて、折々気分がよくなつたように思つても、この疲れは、もはや私から去らないのだわ。疲れていてかえつて楽しい、もしこの疲れがなくなつたら、どんなにか切なく感ずるだろうが、これが如何にも恐ろしい。)」

上に挙げた例にてもわかる通り、比較的長い文で現われる種類の独立的間接話法は、地の文にたくみに溶け込み、一見すると、筆者(話者)の意見として書かれているのか、又は作中の人物が云つている事、考えている事なのか識別し難い場合が少なくない。

次に、独立的間接話法の時制と直接話法のそれと比較してみると、独立的間接話法に於ける過去は、直接話法の現在、或は未来を表わす現在に、過去完了は、過去或は現在完了に、それぞれ相応するのである。前に、独立的間接話法は、直接話法と間接話法との中間的性質を持つていと云うことを述べたが、むしろ、直接話法に近いと云うこと

ができるような場合もある。例えば、上例 4) および 5) に於ては、独立的間接話法で書かれている文章のうち、前半の時制は、過去乃至過去完了で書かれているが、途中から時制が変つて、現在乃至現在完了で書かれているのである。これは、途中から時制だけを直接話法の時制に代えたものである。直接話法の時制、および法をそのまま独立的間接話法に採り入れて用いる、以上のような場合もしばしば見出される。心理的に、更に直接話法の方へ近づいてゆく過程がうかがわれ、この場合には、semi-indirekte Rede と云うよりはむしろ semi-direkte Rede と呼んだ方が適當であるように思われる。

Sterben に出てくる独立的間接話法にも、直接話法の時制、法を用いている場合が少なくない、特に、過去時制で始め、文の途中から直接話法の時制、法を、だんだん取り入れてゆく手法を好んでいるように見受けられる。次に、そうした例を挙げると、

1) Es war Dämmerung, und der Kranke war nach einem ruhigeren Tage eingeschlummert. Jetzt hätte sie sogar gehen können, ohne dass er etwas davon wissen musste, Ach ja, da hinunter, und dort um die Ecke, und wieder einmal mitten unter Menschen und in den Stadtpark und dann auf den Ring und an der Oper vorbei, wo die elektrischen Lampen leuchteten, mitten ins Gedränge, und nach Gedränge sehnte sie sich so sehr. Aber wann würde das wiederkommen? Es kann ja nur wieder kommen, wenn Felix wieder gesund wird; und was ist ihr auch die Strasse und der Park und die Menschen! was ist ihr alles Leben ohne ihn! (S. 75~76)

(もうあたりは薄暗くなつていた。そして病人は、落ち着いた日を過ぎて、すでに眠り込んでいた。彼女は、こんなことを考えた。「こんな時に、そつと出て行つたら病人は知らずにいるだろう。ちよいと階段を下りて、町角を曲ればもう人々の中に、賑やかな公園の中に出られる、それから環状道路へ出て、電燈の沢山点いているオペラ座の前を通れば、人々の雑踏の中に入れる、人々の雑踏が如何にも恋しい。しかし何時そんなことが出来るだろうか。フェリックスが元通り元気になれば勿論出来るだろう、この人がいなくては、街も、公園も、人々も、なにを見つて、なんにもならないわ。)」

2) Auch die letzten Stimmen verklangen endlich vollends, und nun hörte er nur mehr das klagende Rauschen des Flusses. — Ja, noch ein paar Tage und Nächte und dann—Doch sie lebte zu gerne. Würde sie es je wagen? Sie brauchte aber nichts zu wagen, nicht einmal irgend etwas zu wissen. In irgend einer Stunde wird sie in seinen Armen eingeschlafen sein wie jetzt—and nicht mehr erwachen. Und wenn er dessen ganz sicher sein wird,— ja, dann kann auch er davon. Aber er wird ihr nichts sagen, sie lebt zu gerne! Sie bekäme Angst vor ihm, und er muss am Ende allein—Entsetzlich! Das beste wäre, jetzt gleich— Sie schläft so gut! Ein fester Druck hier am Halse, und es ist geschehen. Nein, es wäre dumm! Noch steht ihm manche Stunde der Seligkeit bevor; er wird wissen, welche die letzte zu sein hat. Er betrachtete Marie, und ihm war, als

hielte er seine schlafende Sklavin in den Armen. — (S. 60~61)

(話声もついに全く消えて行つた。そして聞えるものは、もはや訴えるような河のせせらぎだけだつた。男の心にこんな考えが浮んだ。「もう二三日で、もう二晩か三晩で、それから——しかしこの女はまだ生きていたいのだ。思い切つてくれるだろうか。思い切つてくれなくとも、何も知らなくてもよいのだ。いつかは己の腕に抱かれて、今のように寝入つて、それからもう目覚めないだろう。そしてそれをたしかめた上で自分がやるのだ。この女に何も云うには及ばないだろう。あんなに生きてがつているんだから、若し云えば怖がるだろう、そうなると、己は一人で死ななくてはならぬ、それは全く恐ろしい。今すぐ実行するのが一番よいかもしれん、こんなによく眠つているんだから。この頸の所を強く圧えさえすれば、それで済むんだ。しかしそれは馬鹿げている。未だ己には、愉快に暮せる時間が可成り残つてゐるではないか、何時が最後になるか己には多分分るだろう。彼はマリーを熟視した、そして、まるで眠つてゐる奴隷を腕の中に抱いているように、彼には思われた。)

さらに以上の傾向が進むと、独立的間接話法の文章全体が、直接話法と同じ時制、法を以て書かれるに至つた場合も少なくない。例えば、

3) Ein paar Sekunden lang verwirrten sich alle seine Gedanken, dann schoss immer der eine, immer derselbe blitzend hervor. Wo ist sie? Wo ist sie? Ob sie schon oftmals ihn so verlassen hat, während er schlief? Wer weiss? Wo mag sie da hingehen? Will sie nur auf ein paar Stunden dem Dunst der Krankenstube entfliehen, oder will sie ihm entfliehen, weil er krank ist? Ist ihr seine Nähe widerwärtig? Ängstigt sie sich vor den Schatten des Todes, die schon hier schweben? Sehnt sie sich nach dem Leben? Sucht sie das Leben? Bedeutet er selber ihr das Leben nicht mehr? Was sucht sie? Was will sie? Wo ist sie? Wo ist sie? (S. 84)

(暫くの間彼の考えは乱れた、それからただ一つの考え、いつも同じ考えが電光のように閃き過ぎた。「あの女は何処へ行つたのだろうか、何処にいるのだろうか。己が眠つてゐる間に、すでにたびたび出て行つてゐるのではなからうか。わかつたもんじやない。何処へ行くんだらう。ただ二三時間だけ病室の空気から逃れるつもりなのだろうか。それとも己が病氣なので、逃げるつもりなのだろうか。己の側にいるのが厭になつたのだろうか。この部屋に漂つてゐる死の影が怖くなつたのだろうか。生が恐ろしいのだろうか。生を求めているのだろうか。あの女にとつては、己はもう生きてゐるものではないのだろうか。何を求めているのだ、何がほしいのか。何処にいるんだらう、何処へいつたんだらう。)」

上例の独立的間接話法は、直接話法に非常に近く、一見、直接話法と思ふ程で、ただ er という代名詞で、これが独立的間接話法なることが分るのである。

以上の例で分る通り、Schnitzler は、作中の人物の云つた言葉、心の中で考えたことなどを、引用形式も接続法も用いず、直接法を用いて間接話法的に地の文に織り込み、たくみに描写の文中に溶かして行くことにより、文章全体をすこぶるなめらかなものにして、作中の人物の感情を直截的、印象的に表出し、これによつて彼独特の文体を形造つてゐるのである。

北方と国情を異にする Wien に於て、優美繊細にして唯美的傾向を帯びた新ローマ

ン主義文学の代表者の一人と見なされている Schnitzler は、その経験の示すごとく、医学、催眠術に基礎をおく心理的観察に長じ、感情本位、情趣本位の多様性と、形式の完成美は最初から Schnitzler の作品の特色をなしているが、独立的間接話法は、彼のこの特色を表現するための一つのよき手段であると云えよう。さらに彼が特に好んでこの話法を用いたことに就いて見逃してはならぬことは、彼が私淑した Flaubert や Maupassant の影響に就いてである。フランスに於てこの話法 (style indirect libre) をとくに自由自在に用い、しかも成功を収めた者は、Flaubert であり、さらに Maupassant, Zola 等 Flaubert 以後の自然主義作家たちも、この話法を盛んに使用したと云われている。Flaubert や Maupassant の作品を愛読しているうちに、次第に文学に志向するに至った彼が、自らも又、この話法をたくみに駆使して効果を上げんとしたことは当然のことのように思われる。

以上 Schnitzler の作品中における独立的間接話法のはたしている役割と、それより生じた Schnitzler 独特の文体について、大略ながら観察したわけである。

最後に、Sterben 以外の作品に現われた独立的間接話法の例を挙げよう。

1) Die Stimmen kamen näher. Sie begann am ganzen Körper zu zittern Nur hier nicht entdeckt werden. Um Himmelswillen, das ist ja das einzige Wichtige, nur auf das und auf gar nichts anderes kommt es an — sie ist ja verloren, wenn ein Mensch erfährt, dass sie die Geliebte von Sie faltet die Hände krampfhaft. Sie betet, dass die Leute auf der andern Seite der Strasse vorüber gehen mögen, ohne sie zu bemerken. Sie lauscht. Ja von drüben Was reden sie doch? Es sind zwei Frauen oder drei. Sie haben den Wagen bemerkt, denn sie reden etwas davon, sie kann Worte unterscheiden. Ein Wagen umgefallen was sagen sie sonst? Sie kann es nicht verstehen. Sie gehen weiter.....sie sind vorüber.....Gott sei Dank! Und jetzt, was jetzt? Oh, warum ist sie nicht tot wie er? Er ist zu beneiden, für ihn ist alles vorüber..... für ihn gibt es keine Gefahr mehr und keine Furcht. Sie aber zittert vor vielem. Sie fürchtet, dass man sie hier finden, dass man sie fragen wird: wer sind Sie?.....Dass sie mit auf die Polizei muss, dass alle Menschen es erfahren werden, dass ihr Mann— dass ihr Kind— (Die Toten schweigen)

2) Plötzlich kam ihm ein Gedanke, der ihm ein erlösender erschien. Da sie ganz sicher krank war, konnte er ja morgen zu ihr hinaufschicken und nach ihrem Befinden fragen lassen. Der Bote brauchte ja selbst nicht zu wissen, von wem er den Auftrag hatte—er konnte den Namen schlecht verstanden haben...Ja, ja, so sollte es geschehen!— Er war ganz glücklich, dass ihm dieser Einfall gekommen war. (Ein Abschied)

3) Geronimo hielt inne, mitten in einer Melodie; es klang, als wäre seine Stimme und die Saiten zugleich abgerissen. Dann ging er wieder die

Stufen hinauf, und Carlo folgte ihm. In der Wirtsstube setzte er sich neben ihn. Was sollte er tun? Es blieb ihm nichts anderes übrig: er musste noch einmal versuchen, den Bruder aufzuklären. (Der blinde Geronimo und sein Bruder)

4) Bald aber fühlte sie, dass sich irgendeine andere Erinnerung beigesellte. Sie musste an einen Spaziergang denken, mit Emil, im Stadtpark, abends nach dem Konservatorium. Damals hatte er mit ihr auf einer Bank ausgeruht und zärtlich ihre Wangen berührt. War das nur einmal geschehen? Nein——viel öfter, freilich, zehn, zwanzigmal waren sie auf jener Bank gesessen, und er hatte ihr die Wange gestreichelt. Wie sonderbar, dass ihr das jetzt wieder einfiel! (Frau Berta Garlan)

5) Berta dachte nur an Emil. Sie war nahe daran, verrückt zu werden über diesem elenden Geklimper……Nein, es war nicht möglich, so weiter zu existieren, in keiner Hinsicht!……Sie ist auch noch so jung……Ja, das ist es, besonders das……sie wird so nicht weiterleben können……und das geht doch nicht, dass sie irgendeinen anderen……Wie kann sie nur an so was denken! Sie ist doch eine ganze schlechte Person!——Wer weiss, ob es nicht das war, was Emil mit seiner grossen Erfahrung an ihr herausgespürt hat——und warum er sie nicht mehr sehen will…… (ibid.)

6) Er wandte sich fort und trat wieder auf die Strasse. Unwillkürlich blickte er nach dem Haus zurück. Wie anders strahlte die Abendsonne von den Fenstern wieder als vorher! Welche dumpfe, traurige Sommerabendschwüle lag über der Stadt. Kläre war fort?……warum?……Sie war vor ihm geflohen?……Was sollte das bedeuten?……Er dachte zuerst daran, in die Oper zu fahren. (Das Schicksak des Freiherrn von Leisenbohg)

7) Karl flimmerte es vor den Augen, und es war ihm, als wenn die Leute hinter Spinnewebe tänzeln und schwebten. Er rieb sich die Stirn und die Lider, er wollte zu sich kommen. Er konnte ja nichts dafür! Es war ein schreckliches Unglück——aber er hatte doch nicht Schuld daran! Und plötzlich stand er auf, denn als er an das Ende dachte, wollte es ihm die Brust zersprengen. (Das neue Lied)

8) Doch sie vermochte es gar nicht zu fassen, dass es dieselbe Wiese sein sollte, auf der sie heute ruhte: so völlig anders, weiterhingestreckt und leuchtender, hatte sie sie in der Erinnerung bewahrt. Eine sanfte Traurigkeit schlich sich in ihr Herz. Wie allein sie doch war unter all den Leuten. Was sollte ihr die Lustigkeit und das Geplauder ringsherum? Da lagen sie nun alle auf der Wiese und liessen die Gläser aneinanderklingen. (Frau Beate und ihr Sohn)

9) Trüb verworren drang allerlei Geräusch von See und Strasse zu ihr herauf, dunkel stiegen die Berge zur winkenden Nacht empor, das gelbe Feld stand matt leuchtend im rings einerschleichenden Dämmer. Wie lange noch wollte sie selbst so regungslos hier verweilen? Worauf wartete sie denn? Hatte sie denn vergessen, dass Hugo, geradeso wie es gekommen, aus dem Haus wieder verschwinden konnte zu einer, die ihm heute mehr bedeutete als sie—? Es war nicht viel Zeit zu versäumen. Rasch riegelte sie ihre Türe auf, trat in den kleinen Salon und stand vor Hugos Tür. Einen Augenblick zögerte sie, horchte, hörte nichts und öffnete hastig. (ibid.)

10) Diese Botschaft enttäuschte ihn in jeder Hinsicht; jedenfalls aber war es eine andere, als die er törichterweise für möglich gehalten hatte. Immerhin, der Ton war merkwürdig zurückhaltend, gänzlich ohne Schärfe. Er liess erkennen, dass die Leute, die diese Botschaft gesandt, sich keineswegs sicher fühlten.

Zweite Warnung—? Wieso? Ach ja, in der Nacht war die erste an ihn ergangen. Warum aber zweite—und nicht letzte? Wolten sie seinen Mut nochmals erproben? Sollte er eine Prüfung zu bestehen haben? Und woher kannten sie seinen Namen? Nun, das war weiter nicht sonderbar, wahrscheinlich hatte man Nachtigall gezwungen, ihn zu verraten, Und überdies—er lächelte unwillkürlich über seine Zerstreutheit—im Futter seines Pelzes war sein Monogramm und seine genaue Adresse eingenäht. (Traumnovelle)

(3. 11. 1955)

主要参考書目

- Blatz : Neuhochdeutsche Grammatik
 Curme : A Grammar of the German Language
 S. Ichikawa : Dictionary of English Philology
 Krusinga : Einführung in die Deutsche Syntax
 T. Sekiguchi : Vorlesungen über die Deutsche Sprache
 Gesammelte Schriften von A. Schnitzler (Fischer Verlag, Berlin,)
 1928)
 La France (1953, NO.11, 12)

Auszug

Über die erlebte Rede in den Werken A. Schnitzlers

(vorzüglich im „Sterben“)

Fumio NARA*

(Department of German Language and Literature,
Faculty of Liberal Arts and Science)

Bei der Umwandlung der direkten Rede in die indirekte tritt gewöhnlich eine Verschiebung des Modus, der Verbalperson und zum Teil auch des Tempus ein, nach Massgabe der Auffassung der Rede vom Standpunkte des Berichtenden aus. Es entstehen aber besonders im lebhaften Stil der Dichtung Fälle, wo der Berichtende alle Zeichen der Unterordnung abstreift und Gedanken, Träume, Eindrücke, Gefühle usw. eines anderen in grammatisch unabhängiger Form mit dem Indicativus mitteilt. Diese Rede heisst gewöhnlich „erlebte Rede“,

Wenn man in den Werken A. Schnitzlers liest, bemerkt man häufig, dass er im Gebrauch der erlebten Rede sehr geschickt ist und sie viel öfter gebraucht, als andere Schriftsteller. Man kann mit Recht sagen, dass die erlebte Rede eines der passendsten Stilmittel zu der Seelenschilderung darstellt, worin Schnitzler besonders stark ist. Man findet z. B. in seiner ersten Novelle „Sterben“ etwa 61 Stellen, wo die erlebte Rede gebraucht ist. Mehr als 60 v. H. von ihnen sind kurze Sätze, die nur aus einer oder mehreren Zeilen bestehen, und die besondere Aufmerksamkeit erregen. Ferner gibt es manche Fälle, wo die Tempora der erlebten Rede von denjenigen der direkten Rede ersetzt sind. In diesen Fällen kann sich die erlebte Rede der direkten nahen und mit Recht lieber „semi-direkte Rede“ genannt werden. Der gute Gebrauch der erlebten Rede stellt nach meiner Meinung einen der stilistischen Züge in den Werken Schnitzlers dar. Dabei ist es bemerkenswert, dass er durch die französischen Schriftsteller Flaubert, Maupassant usw. stark beeinflusst ist.

*a. o. Professor der Deutschen Sprache und Literatur an der Universität Shinshu.